

Aïe! と「あ痛っ」の狭間で
—フランス語の間投詞と日本語の感動詞をめぐって—
Étude contrastive des interjections françaises et japonaises :
Entre *Aïe!* et *A-ita'!*

竹内 理恵 (Rie TAKEUCHI-CLÉMENT)

Résumé : Un Français quand il se tape sur les doigts ou quand il se brûle la main en sortant un plat du four crie *Aïe!*, alors qu'un Japonais qui se cogne crierait *A-ita'!* (« ah douloureux ») et qu'un autre qui se brûle crierait *Achi'!* (« chaud »). Un Français qui assiste à un malheureux coup de marteau sur les doigts d'un ami ou celui qui apprend que son interlocuteur a échoué à son concours peut aussi faire *Aïe!*, tandis qu'un Japonais dans les mêmes situations ne dirait jamais *A-ita'!* mais plutôt *A!*, *Aaaa!*, *A-abunai!* (« ah dangereux ! »), *A daijôbu?* (« ah ça va ? »), etc. dans l'une et *A sônanda* (« ah c'est donc ainsi »), *A zannen datta ne* (« ah ce fut regrettable je compatis »), etc. dans l'autre. L'objectif de la présente étude est donc de montrer à travers la comparaison du « cri de douleur » français *Aïe!* et de ses pendants japonais *A-ita'!* et *Achi'!* qu'il y a une différence fondamentale de mode de fonctionnement sémiotique entre les interjections françaises, qui n'ont pas de contenu propositionnel mais une fonction de régulateur interactionnel qui y est associée conventionnellement, et les équivalents japonais, qui sont constitués d'une interjection primaire sémantiquement sous-déterminée (*A!* d'étonnement) et d'un ou de plusieurs éléments lexicaux qui représentent un contenu propositionnel (*itai* « j'ai mal », *atsui* « c'est chaud », *abunai* « c'est dangereux », etc.). Nous montrons également que les interjections françaises ont un degré de déicticité moins élevé que les interjections japonaises (« toi/ici/maintenant », « toi/là-bas/à ce moment-là »), ce qui, conjointement avec l'absence de contenu propositionnel, leur permet de faire référence à des expériences vécues par une autre personne ou à des événements narrés qui ne relèvent pas toujours de la douleur physique.

キーワード : 間投詞 (interjection), 感動詞 (interjection), 感嘆 (exclamation), 擬音語 (onomatopée), 類像性 (iconicité), 指標性 (indicialité), 象徴性 (symbolicité), 現場性 (déicticité), 罵り (juron)

1. はじめに

机の脚に膝をぶつけたとき、指にとげが刺さったとき、フランス人¹なら *Aïe!* と叫び、日本人なら「痛っ」、「あいたっ」「いてっ」などと叫ぶだろう。しかし、*Aïe!* と「痛っ」が同じ意味を持っているかと言うと、必ずしもそうとは言えない。そもそも、フランス語の文法では *Aïe!* は interjection (間投詞) に分類されるが、日本語の「痛っ」は感動詞とは言わない。むしろ形容詞「痛

¹ 正確にはフランス語母語話者であり、筆者は日頃フランス人、ベルギー人、ルクセンブルク人、スイス人などに囲まれて暮らしているが、本稿では便宜上フランス人としてまとめる。日本人についても同様である。

い」の一語文と考えられ、その意味をフランス語にすると *J'ai mal./Ça (me) fait mal.* となる。また、揚げ物の油がはねたとき、火にかかった鍋に手が触れたとき、フランス人なら同じく *Aïe!* と叫ぶところを、日本人なら「熱っ」あるいは「あちっ」とは言っても、「痛っ」とは言わない。それは「痛い」ということと「熱い」ということが違うからで当たり前だ、ということにもなるが、では、なぜフランス人は、「痛い」ときも「熱い」ときも、*Aïe!* 一つで済ませるのだろうか。

その上、フランス語では、指を挟んだ本人が *Aïe!* と叫ぶのとほぼ同時に、それを目撃した他人（例えば話し相手）も *Aïe!* と叫んでしまうが、日本語では、目撃した他人は「あっ」とか「大丈夫？」とは言っても、「痛っ」とは言わない。さらには、身体的な痛みなどとは全く関係なく、事態の悪化に直面したときにもフランス人は *Aïe!*、*Aïe aïe!*、*Aïe aïe aïe!*（ときには *Aïe aïe aïe aïe!*）などと言う。日本語では「あっ（大変だ）」「やばっ」「やれやれ」「あーあ（まったく／困ったなあ／またか）」「ああん（もう）」「えーっ（うそー、やだー）」などいろいろ言えそうであるが、少なくとも「痛っ」とか「あいたっ」などとは言わない。

一方、フランス人が沸かしたてとは知らずに金属製湯沸かしポットを持つようとして触ってしまったときなど、もう *Aïe!* では済まない。思わず *Oh putain!* と叫んでしまうのである²。この *putain* はもともと「淫売婦」を意味する卑語で、品詞としては名詞、機能としては *juron*（罵り）であり、日本語では罵詈雑言の類に当たりそうだが、日本語の「売女（ばいた）」ならずとも「畜生」・「ちきしょう」や「くそ」などは、このような状況では現れない。せいぜい「あーっちーっ！！！！」「あちちちちーっ！」などと叫ぶところであろう。そしてこの *putain* も間投詞の一つであるのに対し、日本語の罵詈雑言は必ずしも感動詞には入らないのである³。

このように、フランス語の間投詞は日本語の感動詞と一部重なり合う部分はあるが、その中身はかなり異質なものであり、伝統的に *cri*（叫び声）、*exclamation*（感嘆）、*onomatopée*（擬音語）、*formule*（決まり文句や呪文）、*juron*（罵り）、*mot-phrase*（語文⁴、一語で文を構成する語あるいは語と文の対立が中和されたもの）といった意味や形態・統辞、そして発話機能上の様々なカテゴリーと結びつけられてきた（Świątkowska 2000 ; 2020）。

本稿では、まず初めに日本人の立場からフランス語の *Aïe!* を概観し、次にフランスにおける言語研究において間投詞がどのように捉えられてきたか、その変遷を辿り、間投詞が孕む問題の輪郭を示し、最後に *Aïe!* と「あ痛っ」の比較を通じて、フランス語の間投詞と日本語の感動詞の違いについて考察したい。

² *Putain* は言い憚られるため、*punaise* や *purée* と叫ぶ人もいる。

³ 日本語文法学会編の『日本語文法事典』（2014）によれば、「くそ」は「やった」と並んで感動詞に数えられている。

⁴ 日本語文法には「一語文」というものがあるが、これは一般に、狭義には「犬!」、「水!」、「泥棒!」、あるいは幼児語の「ワンワン」、「アンヨ」などの名詞一語から成る文を指し、広義には、品詞を問わず一語から成る文という意味で、「あっ!」、「ほら」や「うるさい!」、「あぶない!」、「いたい!」など、さまざまな表現に該当する（『日本語文法辞典』p.21、『日本語教育事典』p.156、『新版日本語学辞典』pp.6,54、八亀（2008）、p.90、他）。これに対し、*mot-phrase* とは、本来どのカテゴリーにも属さず屈折を伴わない、他の品詞には分類不可能な、語とも文とも判断しがたい単位を指し、日本語の「一語文」とは区別すべき概念と考えられる。このため、代替案として、一語で一語という意味で「一語一文」、「語＝文」、「語一文」などいろいろ考えてみたが、本稿では取り敢えず「語文」と訳すことにした。

2. 辞書による *Aïe !* の記述

Aïe ! を分析する前に、この言葉が辞書でどのように記述されてきたか、手元にある仏和（・和仏）辞典 8 冊と仏仏辞典 6 冊、およびオンライン仏和辞典 1 冊にオンライン仏仏辞典 3 冊を比べながら見てみたい。

仏和（・和仏）辞典

- (1) 『スタンダード佛和小辞典』（増補改訂版第 8 刷）1984 年、大修館書店：
aïe [aj] *int.* あいた, おお痛い.
- (2) 『ロワイヤル仏和中辞典』1985 年、旺文社：
aïe [aj] (擬音) *interj.* 1 痛い, 痛っ 『*Aïe ! j'ai été piqué par une abeille.* 痛い, ハチに刺された
2 ((しばしば繰り返して)) ちえっ, いやはや, やれやれ [不快な驚き・困惑] *Aïe ! aïe ! voilà que ça recommence !* やれやれ, また始まったか
- (3) 『新スタンダード仏和辞典』1987 年、大修館書店：
aïe [aj] [擬音] *int.* 1. あいた, おお痛い. 2. しまった, いけない; ひどいっ.
- (4) 『ジェム仏和・和仏辞典』1987 年、三省堂：
aïe ! [aj] *int.* 『痛み・不快』あ痛っ. *Aïe aïe !* やれやれ.
- (5) 『ロイヤル・ポッシュ仏和・和仏小辞典』1988 年 (重版発行 1993 年)、旺文社：
aïe [aj] 間 痛い
- (6) 『小学館ロベール仏和大辞典』1988 年、小学館：
aïe [aj] 間投 (擬音) ((しばしば反復して)) ① ああ痛い. ▶ *A~ tu me fais mal. Doucement !* ああっ痛いよ, もっと優しくやって. ② いやはや (不愉快、困惑) ▶ *A~, ~, ~ ! ça se présente mal.* あれあれ, そりゃうまくないね.
- (7) *Le Petit Fuji Diko Français-japonais Japonais-français*, 7^{ème} édition, totalement renouvelée, 2007, Kotoba éditions.
aïe ! *int.* itai! 痛い!
- (8) 『プログレッシブ仏和辞典』第二版、2008 年、<https://kotobank.jp/dictionary/pfj02/>、小学館⁵：
aïe /aj/
[間投]
① ああ痛い.
Aïe! ça fais mal! | あっ痛い.
② ((しばしば反復して)) いやはや (不愉快、困惑)

⁵ <https://kotobank.jp/frjaword/a%C3%AF#w-2567184> (2024 年 10 月 27 日閲覧)

Aïe aïe aïe! | いやはや.

(9) *Larousse Dictionnaire Maxi Poche Plus français-japonais*, 2017, Larousse.

aïe interj. (exprime la douleur) 痛い [itai] ▶ aïe, je me suis tordu la cheville 痛い、足首をくじいてしまった [itai, ashikubi o kujiite shimatta].

仏仏辞典

(10) *DFC : Dictionnaire du français contemporain*, 1971, Larousse.

aïe ! [aj] Interjection qui traduit une douleur ou un désagrément léger et subit (souvent répété) :
Aïe ! fais donc attention, tu m'as marché sur le pied. Aïe ! aïe ! c'est ennuyeux, il va falloir recommencer ce travail mal fait.

(11) *Dictionnaire du français langue étrangère niveau II*, 1979, Larousse.

aïe ! [aj] interj.

[douleur] *Aïe ! tu m'as fait mal !* • *Pourquoi cries-tu « aïe ! » avant qu'on te fasse la piqûre ?*

• *Aïe, aïe, aïe ! ça me brûle !*

S. *Aïe !* est un cri qui exprime une douleur physique légère ou un désagrément.

(12) *Le Nouveau Petit Robert I*, édition entièrement revue et amplifiée du *Petit Robert*, 1993, Dictionnaires le Petit Robert.

AÏE [aj] interj. – 1473 : onomat. ◆ Interjection exprimant la douleur, et PAR EXT. une surprise désagréable, un ennui. ⇒ **ouille**. *Aïe, ça fait mal. Aïe aïe aïe !* [ajajaj].

(13) *Dictionnaire junior*, CE/CM 7-11 ans, 2011, Larousse.

Aïe ! interj. Cri que l'on pousse quand on a mal. *Aïe ! je me suis coincé le doigt dans la porte !*

(14) *Le Dictionnaire Larousse de Poche 2016*, 2015, Larousse.

aïe interj Exprime la douleur.

(15) *Le Robert Poche Plus 2016, Le Robert de Poche* nouvelle édition entièrement revue et enrichie, 2015, Dictionnaires Le Robert-Sejer.

aïe [aj] interj. ■ Exclamation de douleur.

(16) *Dictionnaire de français*, <https://www.larousse.fr/>, Larousse⁶

🔊 **aïe** !

interjection (parfois répétée)

(onomatopée)

Exprime la douleur, la contrariété, l'inquiétude.

(17) *Dico en ligne Le Robert*, <https://dictionnaire.lerobert.com/fr/>, Le Robert⁷

Définition de **aïe** 🔊 interjection

Exclamation exprimant la douleur. → ouille.

⁶ <https://www.larousse.fr/dictionnaires/francais/a%C3%AFc/1853> (2024年10月27日閲覧)

⁷ <https://dictionnaire.lerobert.com/definition/aie> (2024年10月27日閲覧)

▶ Voir aussi :

Qu'est-ce qu'une interjection

Phrases avec le mot **aïe** [例文省略]

(18) *TLFi: Trésor de la Langue Française informatisé*, <http://www.atilf.fr/tlfi>, ATILF - CNRS & Université de Lorraine⁸

AÏE, AHI, interj.

Exclamation qui traduit la douleur, une surprise désagréable, une contrariété soudaine : [例文省略]

— Souvent répétée, avec parfois une nuance d'agacement ou de regret : [例文省略]

(1)から(9)の仏和辞典を比較してまず注意を引くのは、紙面の限られている(1)『スタンダード佛和小辞典』、(5)『ロイヤル・ポッシュ仏和・和仏小辞典』とフランス人向けの(7) *Le Petit Fujy Diko* と(9) *Larousse Dictionnaire Maxi Poche Plus français-japonais* 以外では、*Aie !*は多義語として扱われているということである。豆辞典である(4)『ジェム仏和・和仏辞典』も、番号こそ振ってはいないが、「あ痛っ」と並んで「やれやれ」の用例を挙げている。日本人なら誰でも多義と理解するだろう。一方の仏和辞典の定義を見てみると、「douleur (痛み) を表現する」とするか、「douleur (痛み) などを表現する」とするかの違いはあるにせよ、*Aie !*の意味は一義である。「痛みなど」として表現されるものの取り扱い、(12) *Le Nouveau Petit Robert 1* のように「痛み」を中心に据え *surprise désagréable* (不快な驚き) や *ennui* (困ったこと) をその延長上に位置づける立場と、(10) *DFC*、(11) *Dictionnaire du français langue étrangère niveau II*、(16) *Dictionnaire du français (Larousse)*、(18) *TLFi* のように「痛み」以外の *surprise désagréable* (不快な驚き)、*désagrément léger et subit* (突然ちょっとした不都合なことが起きて迷惑していること)、*contrariété* (不愉快さ) や *inquiétude* (心配・不安) を「痛み」と同等に並べる立場の二つに分かれる。仏和辞典でこの痛み以外のものを表現する言葉として捻出されたものが、一連の「ちえっ」「いやはや」「やれやれ」「しまった」「いけない」「ひどいっ」「あれあれ」であるが、これらの感動詞的表現が日本語では「痛い」と意味的に無関係であることから多義を立てる必要が生じたものと考えられる。しかし「痛い」の *Aie !* と「いやはや」の *Aie !* が、もとは一つであったとしたら、何が共通していて、何が違うのか、考えねばならない。

次に注意すべきは、前掲の全ての辞書が *Aie !*を間投詞 (interjection) に分類しているにも関わらず、仏和辞典では紙面に比較的余裕のある(2)『ロイヤル仏和中辞典』、(3)『新スタンダード仏和辞典』、そして(6)『小学館ロベール仏和大辞典』の三冊に、そして仏和辞典では、(12) *Le Nouveau Petit Robert 1* 及び(16) *Dictionnaire du français (Larousse)*に、「擬音」あるいは *onomatopée* の記述が見いだされるということである。日本人の感覚からすると(日本語文法の立場からすると)、品詞としては情態副詞に分類される擬音語・擬態語は、「感動(詠嘆)」「間投詞」「呼びかけ・応答」

⁸ <http://stella.atilf.fr/Dendien/scripts/tlfiv5/saveregass.exe?62;s=217288560;r=1;> (2024年10月29日閲覧)

(応答詞)、いいよどみなどを表す独立性の高い感動詞とは根本的に相容れない要素ということになる⁹。事実、(8)『プログレッシブ仏和辞典』では、20年前に出版された同じ小学館系の(6)『小学館ロベール仏和大辞典』に見られた「擬音」の記載が消えている。しかし(17) *Dico en ligne le Robert* の解説に見られるように、間投詞の中には *ouf!* (「やれやれ」、「ふう」) や *hop!* (「よいしょ」、「ほら」) のように擬音語に類似しているものもあり、逆に擬音語の中にも *atchoum!* (「はくしょん」)、*boum!* (「どかん」)、*crac!* (「ぼきっ」「ばりばり」)、*patatras!* (「どすん」「ばたん」「がちゃがちゃん」) や *plouf!* (「ぼちゃん」) のように、間投詞と見做されるものもあるという見方が主流である^{10, 11}。このように、フランス語における間投詞と擬音語の関係は複雑に入り組んでおり、仏和辞典が仏仏辞典に見いだされるフランス語文法の錯綜した伝統をそのまま踏襲してきたことがわかる。

また、仏仏辞典に *exclamation* (感嘆) (ロベール系の(15) *Le Robert Poche Plus 2016*、(17) *Dico en ligne Le Robert*、及び(18) *TLFi*) や *cri* (叫び声) (ラルース系の(11) *Dictionnaire du français langue étrangère niveau II*、そして(13) *Dictionnaire junior*) といった記述が観察されることについても一言触れておきたい。仏和辞典が概ね翻訳によって成り立っているのに対し、仏仏辞典は定義によって構成されているわけだが、そこで *Aie!* とは何かを定義する際、それは痛みを表出としての「感嘆」であり、痛みによる「叫び(声)」だと説明しているのである。ここにも、間投詞を人間の言葉以前の、本性による感情の表出としての「感嘆」であり「叫び声」であるとした伝統が垣間見られる。

最後に、仏和辞典では2冊 ((4)『ジェム仏和・和仏辞典』及び(7) *Le Petit Fujy Diko*)、仏仏辞典ではラルース系4冊の見出しが感嘆符「!」を伴っていることも付け加えておく。

3. 間投詞とその周辺

3.1. 感情の表出としての「間投音」／間投詞の語源を遡る

フランス語の *interjection* の語源はラテン文法に設けられた *interjectio* に遡る。これは古典ギリシャ語文法の冠詞を廃止し、これに替わって8番目の *partie du discours* (品詞) として設けられたものである。ルネッサンス期のフランス語文法には主に4世紀の文法家アエリウス・ドナトゥス *Aelius Donatus* (フランス語では *Donat*) の文典を通じて取り入れられていった¹²。*interjectio* は、フランス語では *interjeté*、つまり、他の品詞の「間に投げ込まれるもの」を意味するが、同時代のカリシウス *Charisius* により伝えられる最も古い定義では、*joie* (喜び)、*douleur* (痛み)、*surprise* (驚き) などの感情を表す品詞であるとされる (Vallat 2021, pp.216-7)。表現される感情の種類は

⁹ 『日本語教育事典』 pp.140-141, 302-303。

¹⁰ « Qu'est-ce qu'une interjection » : <https://dictionnaire.lerobert.com/guide/qu-est-ce-qu-une-interjection> (2024年10月29日閲覧)

¹¹ Świątkowska (2020, p.2)は、*Le Petit Robert* の1996年のCD版の状況を *Tout se passe comme si, pour les auteurs du Petit Robert, les étiquettes d'onomatopée, d'exclamation, de cri, etc. étaient considérées comme désignant des sous-classes d'interjections* (*Le Petit Robert* の著者たちにとっては、擬音語、感嘆、叫び(声)などの名称が間投詞の下位分類に相当するものであるかのように)としている。

¹² Vallat (2021, p.216)、Pagani-Naudet (2016)、他。

ドナトゥスの定義になると、*Ars maior* と *Ars minor* の両文典を合わせて、*peur* (恐れ)、*crainte* (懸念)、*souhait* (願望)、*douleur* (痛み)、*joie* (喜び)、*surprise* (驚き) となり、同じく4世紀のディオメデス Diomedes (フランス語では Diomède) になると、*exultantem* (喜び)、*dolentem* (苦しみ)、*gementem* (呻き)、*timentem* (恐れ)、*admirantem* (驚嘆)、*irascentem* (怒り)、*uocantem* (呼びかけ)、*silentium* (沈黙)、*ironiam* (皮肉)、*intentius aliquid demonstrantem* (何かに注意を向けようとする)、*ex inprouiso aliquid deprehendentem* (思いがけず何かを発見したこと)、など多様化している (Vallat 2021, pp.217-9)。

ここで *dolor/douleur* (痛み) あるいは *gementem/gémissant* (呻き) を表す間投詞の例として挙げられているのが *heu/hélas* である。今日でこそ *douleur* 以外にも *affliction* (嘆き)、*déception* (失望)、*plainte* (不満) や *regret* (後悔) など様々な感情が定義に加えられているが、*hélas* は初めから *douleur* (痛み、苦しみ) を表す間投詞の代表であった。以下にフランス語文法に引用されたドナトゥスの例を挙げておく。下線および和訳は竹内による (*admiratiōnem* (驚嘆) については後述参照のこと)。

(19) H. Significatio Interiectiōnum in quo est? *En quoy est la signification des Interiections?* D. Quia aut lætítiam mentis significāmus, *car ou nous signifions ioye d'esprit*, ut E'uohe, *un escri d'un homme ioyeux: Aut dolōrem, ut Heu, hélas : ut, Heu me míserum, Helas miserable que ie suis: Aut admiratiōnem, ut Papæ, vn escri qu'on fait quand on s'esmerueille de quelque chose: Aut metum, ut Atat, ha ha: & si qua sunt simília, & s'il en y a aucunes qui soyent semblables.* (Donat [1545] 1585¹³) (Pagani-Naudet 2016, p.60 より引用)

(=あるいは *Heu (=helas)* [ああ] や *Heu me míserum* [ああ、なんて哀れな私] のように痛みを：あるいは *Papæ (=pape)* のように驚嘆を [何かに驚嘆したときにあげる叫び声])

こうして品詞の一つとして数えられるようになった間投詞も、その位置づけは非常に曖昧なものであり、その地位は非常に不確かなものであった。他の品詞の「間に投げ込まれるもの」であり、文の構成要素としては扱いようがなく、逆に構文的には独立して文の流れを切断する間投詞は、長い間、言語以前の「原始的な声 *voix primitive*」(Rosier 1995, p.110) として捉えられてきた。理性以前の本性的・動物的な唸り声、「肝臓や胃や腹の底から絞り出されて出てくる声」(青木 2015, p.41) として捉えられてきたのである。

16世紀の文法家ルイ・メグレ Louis Meigret (1550)¹⁴も、6世紀のプリスキアヌス Priscianus (フランス語では Priscien) に強く影響を受け、間投詞を品詞の一つに数えてはいるが、実際には言語の構築 (*bâtiment de langage*) に関わらない「声」として、個別文法で扱うべき問題ではないと述べている。激しい感情 *passion* が原因で言葉を介さず自然に発生される声は、溜息やうめき声と

¹³ *Aelii Donati de octo partibus orationis libellus*, Paris, 1585 [1545]. 書名は Colombat (2013)を参照した。

¹⁴ Louis Meigret (1550) *Le Tretté de la grammere françoeeze*, Paris, Chrétien Wechel (édition modernisée Hausmann 1980). Pagani-Naudet (2016, p.62)による。

同じで万国共通だからである (Pagani-Naudet 2016, p.62)。「溜息以上、構築された発話以下」の間投詞は、多くの場合、音声的にも他の品詞から逸脱しており、Meigret (1550) はその「混乱した声 *voix confuse*」を感情の昂ぶりにより呂律が回らなくなって生じるものと説明している¹⁵。

同じく 16 世紀には、感情そのものの表出ではなく、その印 (*note*)、つまり指標 (*indice*) であるという捉え方も現れるが¹⁶、感情との動物的・肉体的・身体的なつながりは常に間投詞に纏わりついてきたのであり、間投詞という品詞が設けられても、その内実は品詞以下の扱いを受け、時には品詞そのものが姿を消した¹⁷。その後も、アルノーとランスロー *Arnauld et Lancelot* (1660) の *voix plus naturelles qu'artificielles* (造られた声ではなく自然な声)¹⁸ やニコラ・ボゼー *Nicolas Beauzée* (1767) の *signes naturels des sentiments* (感情の自然的記号) と *signes arbitraires des idées* (観念の恣意的記号) の対立¹⁹ にみられるように、間投詞は、自然性と結び付けて捉えられ、19 世紀後半から 20 世紀初頭になると、間投詞は感情を表す「語」から *cri* (叫び声)、*exclamation* (感嘆) といった感情を表す「*son* (音)」に格下げされる (Piron 2020, p.149-150)。

一方、ルシアン・テニエール *Lucien Tesnière* (1966) の *phrasillon* (「(文と呼ぶにはあまりにも) 小さな文」) あるいは *mot-phrase* (「語文」、一語からなり一文を構成しているもの) のように、間投詞を「語」として認めるかわりに、「文」のレベルまで引き上げて扱う立場も現れる。ただし *phrasillon* という形式的なカテゴリーは、それまで間投詞のエッセンスでもあった *passion* (熱情) 以外のものとも結びつくことになり、意味・機能的に異質なものを分類する必要があるが出てくる。テニエールはまず、話し手の感情を表すものを、話し手の衝動的な感情を表すもの (*aïe !, oh !, hélas !, dame !, ouais !, ouiche !*)、聞き手に対する働きかけを表すもの (*chut !, hep !, pst !, s'il vous plaît*) の二つに大きく分け、そのほかに知的論理的な関係を表すもの (*oui !, non !, si !, voici, voilà*)、そして最後に、話し手の外界の受け止め方を表すもの、すなわち擬音語 (*pan !*) の四つのカテゴリーを認める²⁰。

この語文が *Goose et Grevisse* (1988) や *Riegel et al.* (2009) に引き継がれ、*Wilmet* (1997) の *phrase à prédication impliquée* (述語付与含意文) となっていく²¹。一方、*Ameka* (1992) は一般言語学的立

¹⁵ *Demonet* (2006, p.60)による。*Demonet* (2006) については、青木 (2015) が紹介・解説しているので、こちらも参照されたい。

¹⁶ *Antoine Fouquelin* (1555) *Rhétorique française*, dans *Traité de rhétorique...* 1990. *Demonet* (2006, p.60) による。*Note* の訳語は青木 (2015)に従った。

¹⁷ *Domergue, F. U.* (1778) *Grammaire française simplifiée*; *Ramus, P.* (1572) *Grammaire*; *Maupas, Ch.* (1607) *Grammaire et syntaxe française contenant règles bien exactes & certaines de la prononciation, orthographe, construction & usage de notre langue, en faveur des étrangers qui en sont désireux. Par Charles Maupas Bloisien, Blois, et Orleans, 1618*; *Regnier-Desmarais, F. S.* (1705) *Traité de la grammaire française* などがその例である。*Piron* (2020, p.148)による。

¹⁸ *Arnauld, A., Lancelot, C.* (1660) *Grammaire générale et raisonnée*. *Piron* (2020, p.149)による。

¹⁹ *Beauzée, N.* (1767) *Grammaire générale, ou Exposition raisonnée des éléments nécessaires du langage, Pour servir de fondement à l'étude de toutes les langues*. *Piron* (2020, p.149)による。

²⁰ *Tesnière* (1959, p.97-99).

²¹ *Wilmet* (1997, 2^e éd., 1998, p.509)は「間投詞」という用語が次第に使われなくなるものと考えていたようである。INTERJECTION L'une des huit ou neuf « parties du discours » aujourd'hui en voie d'abandon. L'étiquette (= « mot jeté entre deux ») ne convient qu'aux intercalations. (〔間投詞〕 8つあるいは9つある「品詞」の一つで、現在、用いられなくなりつつある。間投詞という名称 (= 「2つの間に投げ入れられる語」) は挿入に

場から、もともと間投詞であった一次的間投詞と他のカテゴリーのものが派生して間投詞として用いられるようになった二次的間投詞の区別を提唱する。また語用論の立場から間投詞が直示であることを主張した Wilkins (1992)は、間投詞を語彙素 *lexeme* であり発話 *utterance* であるものとして、形式上の定義を与えている。エナクション理論を言語学に取り入れた Bottineau (2013)は感情が絡み、交人的・対話的な効果を持つ口頭表現の単位を *émotimot* (感情語) や *émotiphrase* (感情文) と呼んでいる。Abeillé et Godard (dir.) (2021)では、間投詞は *Particule de discours* (談話辞) の一種とされ、今日に至っている。

さて、このように見てくると、本来の *interjection* とその訳語の「間投詞」とは同じもののよう
で別物だということが見えてくる。「間投詞」は山田孝雄が『日本文法論』(p.129)において西洋文
典の *Interjection* に当てて「感動詞」の代替案として提案したものだが、フランス語で *interjection*
と言うときには、本来「品詞」「詞」「辞」「(単)語」「語彙」「ことば」といったカテゴリーの意
識はない。それはただの「間投」、つまり「間に投げ込むこと」、「間に投げ込まれたもの」にすぎ
ないのであり、理性の規律の抜け目から吹き出てくる本性・肉体的感情の、統制のとれた文章へ
の「割り込み」なのである。今日の「フィラー」と言うときの「(繋ぎとしての) 穴埋め」と対称
的な発想であると言えよう。品詞として文の構築にも関わらない言語以前の *interjection* は、強い
て言えば、「語と語の間に投げ込まれた、感情の表出としての音声」という意味で、「間投音」あ
るいは「間投声音」とでも呼ぶべきものではなかったろうか。カテゴリー意識のない *interjection*
は、その本質の受け止め方が全く別のものであっても、解釈が徐々に変化していても、また、
いくつもの解釈が複雑に重なり合っている、呼び名には反映されない。*Interjection* が叫び声で
あろうが、一つの単語からなる文であろうが、それだけで文や発話を構成することのできる単語
であろうが、さらにはそれが一度に単語でもあり文でもある形式であろうが、内容であろうが、
表現方法あるいは言語行動であろうが、*interjection* は *interjection* のままである²²。ところが、日本
語の訳語の「間投詞」の場合は、「詞」といった時点で名称が独り歩きし、それはもう初めから言
葉(単語)、あるいは品詞という解釈になってしまう。本稿では便宜上引き続き「間投詞」を使う
が、フランス語の *interjection* というものをより深く理解するためにも、この点を心得ておく必要
があるように思われる。

因みに山田孝雄は、この間投詞という概念が日本語のいわゆる感動詞の本質とあまりにも異質
なものであり、これを日本語の文法にそのまま当てはめることは不可能だという結論に至ってい
る(山田 1908, p.128-136)。その際山田が「かの間投詞とはたゞ單純なる感情より發したる聲音な
るのみ。かゝるものは我にありては所謂雅文には殆存在せねども、又頗多きなり。[…] これらの
――符を加へたるもの [「あいぞ」、「はれ」、「あはれ」、「たんな、たんな、たりや、らん、たり
ちりら」、「はあ」、「えゝゝゝゝ」、これ即かの間投詞にあたるもの、吾人は今文成分としての品
詞を研究せむもの、これらは度外に置きて可なり。」と述べ、その一方で、いわゆる感動詞のうち、
「あ」、「あゝ」、「あら」、「あな」、「あはれ」などは感應副詞としているが、この態度はまさに西

しか適さないからである。)

²² もちろん *phrasillon* や *émotimot* など、それに見合った名称を新しく考案することも可能である。

洋における間投詞の歴史を思わせるものである（同 p.124-125, p.532-535）。これに対し、時枝誠記は『日本文法口語篇』において、「感動詞は、感歎詞、間投詞とも云はれ、話手の感情や呼びかけ応答を表現する語である。感情、呼びかけ、応答の表現ではあるが、これら話手の思想内容を客體化したり、概念化することなく、直接的に表現するものであることに於いて、これを辭の一種と見ることが出来る」としている（p.151）。

3.2. 間投詞と感嘆

先に見たように、間投詞としばしば混同されるものの一つとして、*exclamation*（感嘆）がある。いまここで、この関係をもう少し掘り下げて探してみたい。

フランス語文法における *exclamation* という言葉は、もとは修辞学の専門用語であったものが、もともと文法の専門用語であった *admiration*（驚嘆）に取って代わったものであり、この *admiration* 自体は、やはりルネッサンス期に、ラテン語の *admiratio* が、とりわけ間投詞に関する記述を通して文法用語として広まったものである（Pagani-Naudet 2016, p.60）。

さて、16世紀には文法と修辞学の目的がはっきりと分かれており、二つの分野の考察が交わることはなかった。つまり、当時の修辞学者アントワヌ・フークラン Antoine Fouquelin によれば、文法家は、発話を構文上いかに分解していくかを考える（教える）のが仕事であり、修辞学者（弁論家・雄弁家）は演説・弁論の目的・必要性に応じて、どのような発声法を使うかを考える（教える）のが仕事だったのである²³。このような背景のもと、文法家たちは間投詞の考察を通じて「驚嘆」と構文の関係を模索し、修辞学者たちは、「自分の感情を演出して見せ、受け手の感情を喚起するための効果的な方法²⁴」であり、発声法であり、ひいては叫び *cri* とみられてきた「感嘆」について探求を続けた（Pagani-Naudet 2016, p.63-4）。

そもそもラテン語の *admiratio* は「美しいものに対する感情、驚き」を表していた。上掲のドナトゥスの引用(19)における *admirationem* も、(*vn escri qu'on fait*) *quand on s'esmerueille de quelque chose*（何かに驚嘆したときにあげる叫び声）が示すように驚嘆を意味し、間投詞の表出する感情の一つを示していた。古フランス語・中期フランス語においても、*admiration* は「並外れて美しいもの、素晴らしいもの、偉大なものに対する驚嘆・驚異の感情」を表していたようであるが、16世紀になると、*admiration* は徐々に喜び、恐れ、痛み、欲望、憎しみなどの *passion*（熱情、激しい感情）と結びついていくことになる。そしてこれはまさに間投詞が表出する一連の感情・熱情と一致するのであり、間投詞と驚嘆が共に激しさ *véhément*（息づかいと強さ）を伴って感情を表現するということと相俟って、作家でもあり印刷業者でもあったエチエンヌ・ドレ Etienne Dolet は、この音声現象を *l'admiratif*（「驚嘆符」＝！）で表記し、これを間投詞にあてることを規範とした²⁵。しかし現実にはルイ・メグレのように、*point d'interrogation*（疑問符）は上昇調の、そし

²³ Antoine Fouquelin (1555) *La Rhétorique françoise*, Paris, André Wechel, p.113. Pagani-Naudet (2016, p.62)による。

²⁴ 原文：« l'exclamation est une manière efficace d'exhiber des émotions en vue de susciter l'émotion du destinataire » (Pagani-Naudet 2016, p.63).

²⁵ Etienne Dolet (1540) *De la Punctuation de la Langue francoyse*. Pagani-Naudet (2016, p.61)による。

て *point d'admiration* (驚嘆符) は下降調の韻律を示すものであるとし、間投詞には一切触れていない文法家もいた (Demonet 2009, p.5、Demonet 2006, p.58、Pagani-Naudet 2016, p.61-62)。こうして文法現象として扱いきれない間投詞は、文法においても、自然の「声」という音声現象として処理されることになるのは、上述のごとくである。

一方の *exclamation* は、13 世紀には « *cri de joie ou de surprise* » (喜びや驚きの叫び／叫び声)²⁶ を、15 世紀には « *cri ou parole vive exprimant une émotion* » (感情を表す叫び (声) や生き生きとした言葉)²⁷ を意味していたが、修辞学的用語としては、修辞法の一つであり、figure « *la quelle se fait quant nous parlons par grant admiracion et par une maniere des escry. Helas, que devenray, moy, povre creature !* » (「*Hélas, que devenray, moy, povre creature !* のように驚嘆をもって声を張り上げながら話すときの」表現方法)²⁸ を指していた。このように *exclamation* は *cri* (叫び／叫び声) と結びつけられていたが、具体的な語彙としては間投詞が使われることが多かった²⁹。そして、その叫びが聞き手の心に呼び覚ますべき *passion* (激しい感情) の中身はというと、喜び、怒り、驚嘆、恐れ、と間投詞の表出するそれと同じものだったのである (Pagani-Naudet 2016, p.64)。

こうして見ると、*interjection* (間投詞) も *admiration* (驚嘆) も *exclamation* (感嘆) も *cri* (叫び／叫び声) も、すべて *passion* を通じて繋がっていることがわかる。現在文法で感嘆と呼ばれているものが広く *exclamation* と呼ばれるようになったのは 18 世紀のことらしい。それではなぜ文法用語の *admiration* が *exclamation* に取って代わられたのか。Biedermann-Pasques (1995, p.21) は、ただ一種類の驚嘆を指す *admiration* という言葉に比べ、より一般的でよりの確な、より広い概念領域を包括する新しい言葉が必要だったのではないかと述べている。事実、Pagani-Naudet (2016, p.65) によると、*admiration* は一連の熱情を指すのに使われる一方で、その一種である驚嘆・驚異をも指し続けたのである。こうしてエチエンヌ・ドレの *l'admiratif* や 17 世紀のフルチエール Furetières の *point admiratif* は、17 世紀のデュマルセ Dumarsais の *point pathétique* (痛切符)、さらには 19 世紀のバルザック Balzac の *point d'interjection* (間投符) と、さまざまな呼び名を経て、今日の *point d'exclamation* となったのである³⁰。

現代に至ると、Ameka (1992) は、それまで区別なく扱われていたとする *interjection* と *exclamation* をレベルの違いによって明確に区別することを主張する。すなわち、*interjection* は語レベルのカテゴリーであり、それが文レベルになると *exclamation* となるというものである。*Interjection* は文字通り「間投詞」、*exclamation* は「感嘆文」ということである。今日では感嘆は一般に表現方法として理解されているようである (後述参照)。Abeillé et Godard (2021) では、感嘆は断定・質問・命令・願望とともに発話を構成する言語活動の一種と定義されている。

²⁶ TLFi (2016 年 5 月 16 日閲覧)。Pagani-Naudet (2016, p.63) による。

²⁷ DMF (*Dictionnaire du Moyen Français*) (2016 年 5 月 16 日閲覧)。Pagani-Naudet (2016, p.63) による。

²⁸ 引用は Jacques Legrand (1986) *Archiloge Sophie, Livre de bonnes meurs*. Pagani-Naudet (2016, p.63) による。

²⁹ Demonet (2009, p.7) の挙げているもっとも一般的な感嘆の修辞法でも間投詞が一番上に位置している。

³⁰ Danon-Boileau et Morel (1995, p.8) ; Rosier (1995, p.117) ; Demonet (2006, p.56). Pagani-Naudet (2016, pp.66-68)、Biedermann-Pasques (1995, p.20-21) も参照のこと。

3.3. 間投詞と擬音語

第2節でみたように、擬音語もまた、感嘆とは違った理由から、間投詞と混同されることがある。本稿では擬音語の起源まで遡ることはできないが、Kleiber (2006)の記号学的観点からの考察を通じて、間投詞と擬音語の関係を簡単に整理しておきたい。

Kleiber (2006)は、一次の間投詞と擬音語が今日もなお混同される原因として、どちらも概ね *phrasillon* (語文) として機能する点、どちらも無変化で短く単純な音韻形態をしている点を挙げ、そしてなによりも、擬音語が動物の鳴き声や物音を真似るように、*Ah!*、*Ouf!*、*Aie!*のような *interjection primaire émotive* (一次的感情の間投詞) が、人間の叫び声の物真似から生まれているという捉え方にその原因があるとしている³¹。そして Kleiber (2006)は、*Aiep!*や *Merdep!*などの間投詞と *Plouff!*や *miaoup!*などの擬音語を一つの同じカテゴリーにまとめることは、記号学的に正しくないとして主張する。その主旨は、擬音語では例えば鶏の鳴き声のような生の音の発生 (レベル1) と「鶏が *Cocorico!* と叫んだ」の *Cocorico!* のようにその特徴的な性質だけで構成された部分的な物真似であり、慣習化された言語記号 (レベル2) とが *iconicité* (類像性) の関係で結ばれているのに対し、一次的感情の間投詞においては、語彙のレベルでの類像性は一切関与していない、というものである。事実、間投詞においては、ピエールの *Aie!* という叫び声 (レベル1) と「ピエールが *Aie!* と叫んだ」の *Aie!* (レベル2) は同一のものであり類像性関係にはない。また、*Aie!* と感情³²との結びつきも、擬音語にあるような類像性によるものではない。レベル2の発話者は、ピエールの叫び声の物真似をしているのでもなければ、感情の音声的真似ができるわけでもない。感情には音がないからである。その意味で、同じ人間の発する音声現象でも、*Hih!*や *Hahaha!*は擬音語だが、*Aie!*は間投詞なのである。さらに、*indicialité* (指標性) においても、擬音語と感情の間投詞は区別されなければならないとする。まず、擬音語 *Cocorico!* と、叫んだ鶏の間には煙と火のような指標性関係はない。叫んだ鶏の指標になるのは、言語記号として一般化された *Cocorico!* でも *Kükürükü!* でも *コケッコ* でもなく、これらに似た、しかし生の (そして個別の) 鶏の鳴き声だけである。これに対し、間投詞 *Aie!* や *Hélas!* を発話することは、*Aie!* や *Hélas!* と結びついている感情の *indice* (指標) である。火が煙の直接の原因となっているように、感情が間投詞の直接の原因となっているのである。その際、身体的現象である感情とその指標である言語記号としての間投詞の隣接性を保証するのが、*mode exclamatif* (感嘆という表現方法) による *intensité* (強さ) という超分節の特徴である。*manifestations physiques* (身体的 (音声的) 表出) として感情と隣接しており、随伴性により言語的要素である間投詞と隣接しているからである。

象徴性に関しては、擬音語も感情の間投詞も言語記号としての象徴性を伴っているものであり、このことが一方では生の鶏の声の普遍性に対する各言語における擬音語の個別性につながり、一方では *Aie!* は「痛み」、*Ouf!* は「安堵」、*Waouw!* は「驚嘆」というように、個々の感情の間投詞の

³¹ Świątkowska (2000, p.43, p.62)参照。

³² ここでは一般論として感情としてあるが、Bottineau (2013, p.102)が指摘しているように、本来 *Aie!* を引き起こすのは感情 *émotion* ではなく感覚 *sensation* である。*Aie!* に関する論考 Kleiber (2015; 2016)では感覚が議論の対象になっている。後述参照。

指示可能な意味範囲につながると説明している。そして慣習化されたこの象徴性は、習得されなければ身につかないのである³³。Kleiber (2006)はこれに関し、感情の間投詞に指標性だけでなく象徴的部分（語彙的部分）が必要な理由として、第一に、100パーセント指標性による言語記号というものは存在しないため、第二に、安定した形で原因となる感情と語彙とを結びつけるため、というものを挙げているが、最も重要なのは「感嘆という表現方法は音声的土台が必要だ」ということである。この点については後述する。

最後に Kleiber は、間投詞というカテゴリーに関して、レベル1において、その孤立性・独立性（*mot isolé, autonome*）という形態的特徴が、感情を掻き立てる原因の突然性・突如性（*soudaine* や *subite*）を類像的に表現しており、これが平叙文 *j'éprouve du regret* と間投詞 *Hélas !* の大きな違いであると主張する（後述参照）。

Kleiber (2006)は上述の主張にあたり、「まずはこの問題がすっかり時代遅れのものではないということを示しておく必要がある」³⁴と前置きしているが、20年近く経った今も、状況はそれほど変わっていないようである³⁵。

さて、本稿では冒頭からフランス語の *onomatopée* を擬音語と訳してきたが、それには理由がある。今日では日本でもオノマトペという言葉がよく使われているが、これは一つには日本語には擬音語（擬声語）と擬態語（擬容語・擬情語）の区別があり、これらをまとめた名称が他にないということからきている³⁶。逆に言えば、「オノマトペ」という言葉はこれらのすべてを指すのだが、その語源となったフランス語の *onomatopée* の大部分は擬音語であり³⁷、擬態語があったとしても、一般には日本語のオノマトペのように擬声語と擬態語の区別は特に立てられていない。さ

³³慣習化の考えかたについては Wilkins (1992), Bottineau (2013), Kleiber (2006 ; 2015 ; 2016)参照のこと。

³⁴ « Il nous faut d'abord montrer qu'il ne s'agit pas d'une question dépassée ». Kleiber (2006, p.10).

³⁵ Riegel et al. (1994)と Riegel et al. (2009)の第7版改訂増補版を比べると、間投詞の記述には大きな書き換えがなされており、とりわけ註として « L'interjection a un statut sémiotique différent de l'onomatopée »（間投詞は擬音語とは記号学的位置づけが異なる）(p.772) と、Kleiber (2006)の主張が取り入れられているのが確認できる。その一方で、学術的扱いとは別に、現代フランスにおける間投詞の一般的な理解がどのようなものかを知るために本稿筆者が試しにウィキペディア <https://fr.wikipedia.org/wiki/Interjection>（2024年10月13日閲覧）で確認したところ、やはり *onomatopée* も *interjection* の下位カテゴリーとして含まれていた。興味深いので引用する。（下線は本稿筆者による。）

Une **interjection** est une catégorie de mot invariable, permettant au sujet parlant, l'énonciateur, d'exprimer une émotion spontanée (joie, colère, surprise, tristesse, admiration, douleur, etc.), d'adresser un message au destinataire (acquiescement, dénégation, salutation, ordre, etc.), ou encore de réaliser — approximativement — une image sonore d'un événement (cri d'animal, explosion, bruit quelconque, etc.)

L'interjection peut également consister en un syntagme ou en une phrase. Certains grammairiens la définissent parfois comme un *mot-phrase*, puisqu'à elle seule, elle équivaut à toute une phrase, de type exclamatif ou interrogatif.

（間投詞とは話し手・発話者が自発的な感情（喜び、怒り、驚き、悲しみ、驚嘆、痛みなど）を表したり、話し相手に何か（同意、拒否、挨拶、命令など）を伝えたり、あるいは大雑把にはあるが、なにか出来事の音（動物の鳴き声、爆発音、その他もろもろの物音など）を再現したりするときを使う、屈折を伴わない語をまとめて言う。[以下省略]）

また、フランス語のオノマトペのリストをインターネットで検索すると、大概のリストに間投詞が含まれていたことも付け加えておく。

³⁶ 小野 (2007, p.8)、山口 (2019, p.v)。

³⁷ 小野 (2007, p.7)、山口(2019, pp.v-vi)は、日本語のオノマトペという名称はフランス語の *onomatopée* に由来し、これを擬音語・擬態語の区別をせずにまとめて呼ぶときに使用するとしている。

らに、onomatopée の定義を見ても、ギリシャ語の語源に近い「名称のないものを命名することによる造語」というものを除けば、上述の Kleiber (2006)でもわかるように、「音」が最初に来る。日本語の擬音語の定義に当てはまるものなのである。

ここで一つ注意しておきたいのは、フランス語の onomatopée は日本語のオノマトペのような特有の精密な音韻・形態システムをもっていないということである³⁸。それどころか、一般言語学的に見ても、一部の間投詞と擬音語に共通する形態的特徴の一つとして、通常の語彙の音韻システムにはない特異な音声が見られることが挙げられている (Ameka 1992)。日本語における感動詞にも、「りきみ」「ささやき」「韻律」など数多くの特有な音声現象が観察されるが³⁹、これは語彙形態レベルのオノマトペのものとは全く異質のものであり、オノマトペと感動詞がそれぞれ独立した音韻システムをもつ日本語とは事情が異なる。

以上の点を考慮すると、擬音語における動物の cri (鳴き声) と間投詞における人間の cri (叫び声) との並行性、および擬音語である *Plouf!* (「ポチャン」) や *Ouaf!* (犬の「ワン」) や *Areu* (赤ちゃんの「ばぶばぶ」) の音韻形態と間投詞である *Ouf!* (「やれやれ」) や *Ouah!* (「わあ」) や *Aie!* (「痛っ」) の音韻形態との並行性は、日本語話者の目に映る以上に正当性のあるものに見えるに違いない。間投詞の定義の変遷をより深く理解するためにも、以上の点を念頭に置いておく必要があると思われる。

4. *Aie!* と「あ痛っ」

4.1. *Aie!* の痛みとその原因

既にここまで見てきたように、フランス語の *Aie!* は広く *cri de douleur* (痛み／苦痛の叫び声) として、叫び声や擬声語と関連付けて取り上げられてきた。Kleiber (2015 ; 2016) は Kleiber (2006) を補う形で、その「痛み／苦痛」がどのようなものであるかを明確にすると同時に、記号学的観点から上に見たような「擬声語としての間投詞」説に終止符を打つことを目的としている。本節では、Kleiber (2015 ; 2016) による *Aie!* の「痛み」の分析をもとに、日本語の「痛っ」や「あちっ」と比較しながら、それぞれの表現の特殊性について考察する。

Kleiber はまず初めに *Aie!* の喚起する「痛み」が身体的なものであることを確認している。それは、一つには、フランス語の *douleur* は、肉体的な痛みと精神的な苦痛の両方を兼ねており、どちらが問題になっているかを知るには文脈に頼るしかないというフランス語特有の事情があるからである。これは日本語で「痛み」「痛い」「痛む」と言うと、まず身体的な痛みを思い浮かべると対照的である。

次に Kleiber はその肉体的痛みのアスペクト的特徴として、*inchoatif* (起動性)、*ponctuel/perfectif*

³⁸ 日本語のオノマトペの音韻・形態システムに関しては浜野 (2014) 参照のこと。

³⁹ 定延 (2005 ; 2015) 参照。

(瞬間性・完成相⁴⁰)あるいは *achèvement* (到達)⁴¹、そして *causatif* (起因性) の三点を挙げている。つまり、肉体的な痛みが状態として続くのではなく、瞬間的で持続しない出来事として思いがけない突然の新たな痛みを感じたとき、痛みが徐々にではなく瞬時に現れるとき、そしてその痛みが確認可能な別の出来事に起因するとき、*Aie !*が発せられるというものである。そして、痛みの発生の突然性、瞬間性、不意性というアスペクト的特徴は、原因となる出来事のそれに起因していると説明している。この起因性の根拠として Kleiber が挙げているのは、発せられた間投詞 *Aie !*は聞こえても、その原因となる出来事が確認できなかった場合、我々は *Qu'est-ce qu'il y a ? / Qu'est-ce qui s'est passé ? / Que vous est-il arrivé ?* (どうしたんですか?) と尋ねる事ができるという事実である。

ここまでの分析を日本語と比較してみると、フランス語の場合は痛みの原因となる外的出来事がどのようなものであるかという限定がないのに対し、日本語の場合は痛み・刺激の原因が「極端に熱いもの、想像を超えて熱いものに触れたとき」という弁別的意味素性が関与していることがわかる。熱いもの場合は「あちっ」、そうでない出来事の場合は「あ痛っ」となるからである。その意味でフランス語の *Aie !*は日本語の「あ痛っ」や「あちっ」に比べて原因の意味素性の限定性が低いと考えられる。Kleiber (2006)が指示範囲を特定化できない一次的感情の間投詞 *Ah !*や *Oh !*について、多義語であるというよりも、「痛み」の *Aie !*や「安堵」の *Ouf !*に比べて意味的な限定性が低いと言っているのと同じ理屈である⁴²。

また Kleiber は *Aie !*によって表現される痛みの局所性を指摘している。外部の物理的な出来事は、大概身体の局部に影響を与えるのであり、そのため痛みを孕む部分も確認可能な限られたものということになる。そして、この局所性という意味素性のために、*Aie !*が精神的な痛みを表すことができないのではないかと考える。つまり、精神的な痛みは「ここだ」といえる箇所がないからである (Kleiber 2016, p.117)。

(20) A : *La mort de son petit chien l'a beaucoup touché* (可愛がっていた子犬が死んでしまって、彼はいまでも悲しんでいる [悲しみに打ちのめされている])

B : * *Où ?* (どこを?)

この考察は日本語の「痛っ」にも「あちっ」にも当てはまる。「あ痛っ」「大丈夫? どこぶつけ

⁴⁰ フランス語の *perfectif* は広く「完了 (相)」と訳されているようであるが、同じく「完了 (相)」と訳される英語の *perfect* やフランス語の *accompli* との混同を避けるため、敢えて日本語文法で使い慣れた「完成相」を用いた。スル形の「完成相」はシテイル形の「継続相」と対立しており、*perfectif* と *imperfectif (duratif)* の対立に対応している。今日の英語の *perfective* の訳語としては「完結相」も広く使われているようである。

⁴¹ Vendler の提唱する4つのアスペクトのカテゴリー *states, activities, accomplishments, achievements* の一つで、瞬時に終わる動作を指す。動作に終点がある点で *activities* と対立し、動作に継続性がない点で *activities* と *accomplishments* に対立する。Vendler, Zeno (1967) *Linguistics in Philosophy*, Cornell University Press.

⁴² « il s'agit de sous-détermination sémantique plutôt que de polysémie ». Kleiber (2006, p.16).

たの？」／「あちっ」「どこ、どこ？みせて」などと言えるからであり、「あ痛っ」が「ああ、(哀しいかな)」のように精神的苦痛を表すことはないからである。

さらに、*Aïe !*の示す痛みの強さに関して Kleiber は、虫歯の治療中に神経が刺激されたときの鋭い痛みを例にとり、一般に受け入れられている「弱い痛み」という条件は強すぎると主張する。そして、一般に *Aïe !*の示す痛みが弱く思えるのは、実は痛みが非継続的であることと、通常は外部的原因が日常的で些細な出来事に限られることから来ていると説明する。つまり、原因となる出来事が治まるのと同時に、瞬時にして現れた痛みも消えてしまうという事実によると考えるのである。この点に関して、*Aïe !*と日本語の「あ痛っ」「あちっ」との間に、特に違いは見られないようである。

これらの考察から、Kleiber は二つの結論を導き出している。まずは痛みのアスペクト的特徴から、*Aïe !*が表現するものとしての *douleur* (痛み・苦痛・苦悩) と *souffrance* (苦しみ・苦痛・苦悩) を区別する必要があるということである。前者は起動性・瞬間性と矛盾しないが、後者は継続的な状態を表すのであり、間投詞 *Aïe !*の表す痛みとは合致しないという主張である。Kleiber のこの結論は、昔から間投詞 *Hélas !* (ああ [悲嘆・苦悩]) と並んで、*Aïe !*が *douleur* や *souffrance* の叫び声として扱われてきたことを念頭に置いてのことと思われる。以下は *Aïe !* が実際に *souffrance* に結びつけられている例である (下線は竹内による)。

(21) ■AÏE, AHL, interj.

Étymol. ET HIST. – 1473, exprime la souffrance (*Doc. hist. inéd.*, tirés des coll. mss de la Bibl. Royale, publ. par M. Champollion-Figeac, 1841, t. 1, 2^epart. p. 704 : Et lui estant illec, oyt une personne qui se plainnoit en disant *Aye!*) (CNRTL, <https://www.cnrtl.fr/etymologie/a%C3%AF> より引用)

またこのことは、フランス語の *douleur* や *souffrance* においては、肉体的なものや精神的なものとの区別が弁別的意味素性でないということの意味する。そして Bottineau (2013, p.102)が指摘しているように、*Aïe !*と言わしめるものが、実は *émotion* (感情) ではなく *sensation* (感覚) であるにもかかわらず、なぜ、それが長い間 *émotion*, *affect*, *passion* (感情) と呼ばれてきたかを説明している。

二つめの結論は、*Aïe !*と *J'ai mal* の違いに関してである。この *J'ai mal* は、広く *Aïe !*の言い換えと考えられてきたが⁴³、上に見たアスペクト的特徴からすると、*quelque chose m'à/me fait mal* (何か起きたせいで痛みを感じた／痛みを感じている)、*quelque chose vient de me faire mal* (たった今何か起きたせいで痛みを感じた) あるいは *ça m'à/me fait mal* (このせいで痛みを感じた／痛みを感じている) と言わなければならない、という主張である。本稿筆者も *ça m'à/me fait mal* あたりが妥当な気がするが、ここではその判断は保留したい。間投詞の *Aïe !*と平叙文・叙述文であ

⁴³ Wilmet (1997, p.546, 3^e éd., 2003). Kleiber (2006, p.12)による。

る *J'ai mal* あるいは *Ça me fait mal* にはもっと大きな根本的な違いがあるからである。

4.2. 間投詞 *Aïe !* と「あ痛っ」の象徴的意味

Kleiber (2016) は、間投詞 *Aïe !* とその言い換え文 *j'ai mal* の違いとして、平叙文・叙述文の *j'ai mal* の真偽価値は否定(22)も肯定(確認) (23)もできるのに対し、痛みの指標である *Aïe !* はそれができないと述べている (Kleiber, 2016, p.122)。

(22) A : *Aïe !*

B : — **C'est faux ! / Ce n'est pas vrai*

A : *J'ai mal*

B : — *C'est faux / Ce n'est pas vrai*

(23) A : *Aïe !*

B : ? *Je le sais*

A : *J'ai mal*

B : *Je le sais*

また、平叙文は質問の答えになるが、間投詞は答えにならないことも指摘している (Kleiber 2016, p.122-123)。

(24) A : *Tu as mal ?*

B : (*Oui*) **Aïe !*

A : *Tu as mal ?*

B : (*Oui*) *j'ai mal*

これは指標記号である *Aïe !* は話し相手に情報を伝えるという機能を持っていないからだという説明である。

さて、第3節までの調べでは、(一次的) 間投詞は一語にして一文に相当する、という特質が浮き彫りになった。この「一文」は「一発話」とも「一言語行為」とも言い換えられる。一方「一語」の部分は、ほかの品詞には属さず屈折を伴わない語という条件が付いている。その意味で、フランス語の *Aïe !* に相当する日本語の「痛っ」は(一次的) 間投詞には当たらない。構文的には形容詞の一語文であり⁴⁴、フランス語の *Aïe !* の言い換え文の *j'ai mal* に相当するものである。形が多少変わっているので感動詞に分類することもできそうだが、では、どこまでが形容詞文で、どこからが感動詞かということになると、答えははっきりしない。取り敢えず *Aïe !* 相当の「あ痛っ」と *J'ai mal* 相当の「痛い」に上の(22)-(24)のテストを適用してみよう。

⁴⁴ 八亀 (2008, p.90)。

(25) A: あ痛っ／痛い

B: — うそ (でしょ) / 痛くないよ

(26) A: ?あ痛っ／痛い

B: うん、しってる／うん、わかってる

(27) A: 痛い?

B: (うん) *あ痛っ／痛い

(22)-(24)と(25)-(27)を比べてみると、「あ痛っ」の結果が *Aie!* と *j'ai mal* の中間に位置していることが明確に表れる。例文(25)は、「あ痛っ」が *j'ai mal* や「痛い」と同様に文としての命題的な意味を提示しているということを示しており、(26)と(27)は「あ痛っ」が *Aie!* と同様に直示性・指標性によって命題提示以外の言語行為を行っているということを示している⁴⁵。

このことは、一つにはなぜフランス語の *Aie!* が日本語の「痛っ」や「あちっ」よりも意味的限定性が低いかということに繋がる。*Aie!* の象徴的レベルには「痛っ」や「あちっ」と違って *Je me suis fait mal* (痛い思いをした) や *Je me suis brûlé* (やけどした) という命題的意味がないのである。もう一つには、(26)や(27)の「あ痛っ」が *Aie!* のように指標記号として機能するのは、「あ痛っ」の「あ」の部分が指標性を持っているからであり、「痛っ」の部分はこの指標性 (あるいは「驚いた時に発する」という象徴的意味) に「驚きの原因は痛みである」という意味素性の限定を加える役目を担っているということを示している。

そして、これは *Aie!* ひとつに限ったことではない。フランス語の *Ouf!* も、辞書には「ふう」「やれやれ」(安堵の気持ち) などとあるが、実際の状況を想像しながら日本語にすると、「はあ／ああ／あよかった」「はあ／ああ／あほっとした」「はあ／ああ／あ間に合った」「はあ／ああ／あ助かった」「はあ／ああ／あ (やっ) 終わった」「はあ／ああ／あ (やっ) 出来た」と、実にさまざまな表現にあたりそうである。Kleiber (2006) の結論はたった三言、*Ouf! ... tout simplement!* で終わっている。Świątkowska (2020) はこれを、険しい道のりを越えて、やっとな終着点に辿り着いた末の *Ouf!* と解釈しているようであるが、これも、安堵感のみならず達成感あるいは満足感ととることができるはずである。これも一方では *Ouf!* の意味的な限定性が低いということを証明している。

こう考えると、*Hélas!* が「ああ (哀しいかな)」の「ああ」であるように、*Aie!* は実は「痛っ」ではなく「(痛い思いをした時の) あ」、「(熱い思いをしたときの) あ」、ということになる。そして *Aie!* という分節の慣習化によって得られる象徴的レベルの意味は「なんらかの (突然で不意の瞬間的で些細な) 出来事が原因で痛みを感じた時の」といった、条件的意味素性だということに

⁴⁵ ここでの言語行為は、Kleiber が Ducrot (1884, p.200) の言葉を借りて説明するところによれば、それは、発話の外側にあるものとして感情について語るのではなく、発話の内側にあるものとして、感情を演じて見せるということになる。Kleiber (2006, p.18). これは Wilkins (1992) の考える聞き手目当てではなく自発的な内面表出的な発話にあたる。また、Bottineau (2013) のように、エナクション理論の立場から、対話を調整するための対人的、社会的な行為と考えることもできる。

なる。*Aie ! ça fait mal !*が「痛っ、痛い」ではなく「ああ、痛い」に近いということもその論拠の一つになるだろう。

4.3. *Aie !*のさまざまな用法

*Aie !*が自分の痛み以外にも用いられることはすでに触れたが、Kleiber (2015 ; 2016)は、本来の痛みに対する自発的な反応以外の用法として、聞き手に働きかけるための用法、苦情を訴える用法、共感による用法の三つを挙げている。一つ目は例えば歯医者で治療中、歯を削って神経を刺激されたときの訴えの *Aie !*である。「そこを触ると痛いですが、それ以上削らないでください」という意図であり、Bottineau (2013) の言うところの間投詞に備わった対話運びを調整するための« *prêt à réagir* » (既製の感情パターン・行動パターン)⁴⁶に基づいた役割配分の威力を発揮する場面である。口が開いていて、舌が使えないのだから、日本語では「あ、あ」「あいあっ」ぐらいではないかと思われるが、これが別の部位の治療であれば、「あ痛っ」よりは「痛っ」「痛いっ」「いたた」のほうが自然ではないだろうか。定延 (2015)は感動詞などが人間の内部状態と結びつくとき、「いま・ここ・私」の内部状態に限って結びつく度合いのことを「現場性」と呼んでいるが⁴⁷、現場性の高い驚きの感動詞「あ」は、思いがけなさ（不意性）を帯びているため、初めから痛いかもしれないとわかっているときには使われないのかもしれない。逆に言うと、不意性とは相容れないこのような状況で使用されるフランス語の *Aie !*は、必要に応じてその不意性が中和されるということの意味する。言語記号としての象徴性が威力を発揮するということは、指標性が影を潜めるということなのかもしれない。

二つ目の苦情を訴える用法とは *Ai-e !*と最後の *e* にもアクセントを置いて、高-低のイントネーションで発音するもので、「いたいっ」「(あん) 痛いじゃない」「いってえな」「(あん) 痛いよ」などに対応するものである。日本語の「あん」は「あ」に比べ、指標性をもって出来事に反応し、その後自発性が薄らいでいくというように、二つの性質が順番に表れていると説明できるが、この *Ai-e !*も発話が二段階に分かれており、前半は自発的、後半は対人的な性質を帯びていると言える。

三つ目の用法は共感によるもので、例えば市電に駆け込んだ女性がドアに挟まれたところを目撃した乗客が、共感して *Aie !*と叫ぶものである。ここまできると *Aie !*と「あ痛っ」は完全に分離してしまう。この場面では、日本語の感覚では、「あっ」「あああ」「(あ) 危ないっ」「あっ大丈夫ですか」などとは言いようがない。このことは「あ痛っ」が *Aie !*よりも現場性が高いということを示している。「痛い」に限らず、日本語の感情形容詞は「わたし」の内部状態としか結びつか

⁴⁶ « Ces quasi-réflexes verbaux, de forme normalisée par l'usage collectif, fournissent aux usagers des sortes de « prêt à réagir », des gammes de gestes émotionnels préformatés qu'un sujet peut exécuter à tout moment, seul ou en présence d'autrui, et être compris ». (集団的使用により規範化された形態を持ち、言葉による反射にも似たこれらの表現は、言語使用者に、さまざまな「既製の反応」、つまり、主体がいつ何時、一人の時も、他人といる時も、実行し、理解してもらえらる一連の予め型にはまった感情のふるまいを与えてくれる。) Bottineau (2013, p.102).

⁴⁷ 定延 (2015, p.6)。

ない非常に現場性（主観性）の高い言葉である。それに比べ、間投詞 *Aie!* の現場性は、「いま・ここ・私」のうちの「私」が共感で中和されることがあるということの意味する。

これ以外にも、なにかが壊れたり倒れたりこぼれたりするのに立ち会ったとき、なにか失敗をしたとき、さらにはこれから大変なことになる、という情報を得たときなど、*Aie!* や *Aie aie!*、*Aie aie aie!* が頻繁に使われる。これらの出来事は *Aie!* の痛みの原因に見られた起動性あるいは瞬間性、不意性、突然性、日常茶飯事性を兼ね備えているものであり、この条件を満たす限り、身体性の痛みがなくても、*Aie!* が使えるものと考えられる。この事実は、*Aie!* と痛みの関係が直接の繋がりではなく間接的なものであり、原因の認識のほうが本質的であるということを示してはいないだろうか。突然の不意の出来事、それも日常よくあるちょっとした不慮の出来事、これが身体に触れず、痛みが生じなくても、その出来事が痛みに通じると認識されたとき *Aie!* が出てくると考えれば、（叩かれなくても）叩かれそうになった時、（下敷きにならなくても）何かが崩れ落ちた時、（自分は叩かなくても）いっしょに家具を組み立てていた友達が指を金槌で叩いてしまった時、何らかの形で身の危険を感じた時（例えばなにか失敗をやらかして、上司に呼び出された時や、親に真面目な顔つきで「話がある」などと切り出された時）、何らかの形で他人の身に迫る危険を感じた時（不器用な子供がまた失敗をやらかしそうになった時）、*Aie!* を使うことに不思議はない。その時の *Aie!* がまさに仏和辞典の第2義に見られた、「ちえっ」「いやはや」「やれやれ」「しまった」「いけない」「ひどいっ」「あれあれ」などと訳されることになるのである。そしてこれは、*Aie!* には「痛い」や「熱い」のような「文字通りの意味」がないことに起因している⁴⁸。

最後に、Kleiber (2015 ; 2016) では触れられていないが、*Aie!* が話の中で描写されている出来事に反応するために使われることがある。

(28) A : *Alors, ton concours ?* [で、試験どうだった?]

B : *J'ai pas été reçu.* [落ちた]

A : *Aïe ! / Zut ! / Mince ! / Merde ! / Ah merde ! / Ah bah merde !* [あ／え、そうなんだ…]

この *Aie!* は諸々の *jurons du dépit* (苛立ちの罵り言葉) と並んで、森山 (2015) の言うところの「新情報遭遇の応答」、特に「新情報によってもたらされる状況への情動的反応」の働きをしている⁴⁹。日本語で言えば「あ／え、そうなんですか…」「あ／え、残念でしたね」あるいは「あちゃー」「あらら」「はあー、たいへんねー」などに当たる。このことはフランス語の間投詞が日本語の「あ」「え」のような感動詞とは対称的に、極めて現場性が低いということからきているものと想像さ

⁴⁸ *Aie!* には「文字通りの意味」がない、「痛い」という意味はない、ということ、この困ったときの *Aie aie aie!* が以下の例文のように平叙文あるいは述語相当の機能を果たす時に、「*Aie aie aie!* と叫ばずにはいられない状況に身を置く」すなわち、「大変な事態に直面する」という意味を持つという事実によっても裏付けられる。

Si on est trop gentil, aïe, aïe, aïe... — Aie aie aie pour nous ou pour les autres ?

(人が好過ぎると、とんだことになるんだ — 誰にとつとんだことになるの？自分？それとも周りの人たち？)

⁴⁹ 森山 (2015, p.53-57)。

れる。定延の言葉を借りれば、「その時、その場所で、あなた」、さらには「その時、その場所で、その人」の内部状態への共感という形で理解できるからである。上掲の(1)『新スタンダード仏和辞典』では「ひどいっ」が「しまった」、「いけない」とはセミコロンで仕切られていたが、もしかすると、これは「その時、その場所で、あなた／その人」の内部状態への共感を表している *Aie!* を訳したものでなかろうか。この「新情報遭遇」の *Aie!* に当たる「え、そうなんだ」「あちゃー」などが仏和辞典における *Aie!* の第三義として収められる日が来るのだろうか。

6. まとめ

本稿では、まず初めに辞書における *Aie!* の扱いを観察し、第3節において、フランス語における *interjection* というものの理解を深めるため、その語源を遡り、それに纏わる擬音語や感嘆といった似て非なるものとの係わりを探った。そして、間投詞の言語記号としての記号学的働きを確認した後、第4節では、実際に *Aie!* と「あ痛っ」・「あちっ」を比較することによって、*Aie!* とは何かを考察した。

結論の第一点目として、仏和辞典では *Aie!* に「あいた」「おお痛い」「ああ痛い」「あ痛っ」「痛い」「痛っ」などの意味を与えているが、本来 *Aie!* 自体には「痛い」・「熱い」（あるいは *j'ai mal*）という意味はないということを見た。言語学者や辞書編纂者の *J'ai mal* という解釈は、*Aie!* が慣習的に痛みを感じた時に発せられる間投詞だということによっているに過ぎない（象徴的意味素性、すなわち慣習によりシニフィアンに結びつけられた恣意的意味素性）。その意味では、偶然とは言え、7歳から11歳の子供向けの辞典 *Dictionnaire junior* に見られる定義 « Cri que l'on pousse quand on a mal » が最も本質を掴んでいるのが興味深い。

第二点目として、フランス語の *Aie!* の意味的限定性は日本語の「あ」と「あ痛っ」・「あちっ」の中間に位置するということを見た。つまり、「あ」には慣習的に、「驚いた時に発する」という象徴的意味素性があるだけで、具体的にどんな場面で発するか、といった限定はない。実際「あ」は「あ痛っ」や「あちっ」だけでなく、「あ、いけない」や「あ、しまった」のようにも用いられるのである。これに対し *Aie!* の場合は「ある特定の痛みを感じたと認識した時に発する」という象徴的意味素性を持つが、「あ痛っ」や「あちっ」のように、「原因が極端な熱さである」／「原因が極端な熱さではない」といった限定はないからである。

第三点目として、「あ」と *Aie!* だけの問題ではなく、日本語の感動詞に比べて、フランス語の間投詞は全体的に現場性が低いということを見た。「あ」は「いま・ここ・私」の内部状態と結びついた感動詞であるが、*Aie!* は「その時、その場所で、あなた」さらには「その時、その場所で、その人」の内部状態とも結びつき得る。そして同じことが二次的間投詞である苛立ちの罵り言葉にも言えることを見た。

第四点目として、フランス語の間投詞とは、対話運びを調整するための既製の感情パターン・行動パターンに基づいた場と役割配分を象徴的意味とし、それに見合った感嘆の超分節的（韻律的）特徴を担い得る、単純な音韻単位であるということが浮かんでくる。つまり、*Aie!* という音韻形態は、それと同定でき（つまり「痛みを感じた話し手はそれを発することでそれと知らしめ

る」、「それを知らしめることで原因を起こした者、原因から痛みを受けた者（話し手自身）、さらにはその場に居合わせ、心配したり同情したりする者の役割を振り分ける」ひいては「痛みを感じた話し手がそれを発することで、歯医者は発話者の痛みを察知し、歯を削るのを止める」といった象徴的な意味は確認でき)、その音声に感情だけは込められるが、具体的な語彙的、あるいは命題的な意味はないということである。このことは、なぜフランス語における罵りの間投詞の多くが他から借りてきたものか、という問いに対する答えにも繋がる。文脈からして無意味な言葉を発するという事は、その言葉の語彙的な意味を取り消すことになるからである。*Purée!* (もともとは「ピューレ」)、*punaise!* (「トコジラミ」)、*putain!* (「淫売婦」)、*flûte!* (「フルート」)、*mince!* (「薄い」)、*merde!* (「糞」)、*bordel!* (「売春宿」) は皆、他のカテゴリーからの借用である。日本語にすると、「わあ、すごい!」「あー悔しい」「え／あ、ひどい」「あ、いけない」「あ、しまった」「やばっ」「あーあーあー」「あーもー」「あーびっくりした」「あーあぶなかった」などに対応するが、日本語のように明示的な意味はなく、かといってそれでは言い切れない何かがある。その何かは既製の感情パターン・行動パターンということなのかもしれない。何を明示的に述べ、何を暗示的に表現するのか。ここに、フランス語と日本語の発話機能の根本的な違いが垣間見られる。

Tesnière が述べているように、フランス語の間投詞を使うということは、時にはいくつもの文を重ねてやっと説明できるほどの複雑な内容を、それが集約された一言で言い切るということなのである。

Certaines interjections arrivent même à exprimer des états d'âme et d'esprit si nuancés et si complexes, qu'elles en disent à elles seules plus qu'une phrase entière et qu'il faut de **longues périphrases** pour en analyser et en définir le contenu sémantique. (Lucien Tesnière, 1959, p.94、強調は竹内による)

(間投詞の中には、一文では言い切れないほど微妙で複雑な心境や心情をたった一語で言い表すものもあり、これらの間投詞が意味するところを分析して定義しようものなら、いくつもの長い言い換えが必要になるほどなのである。)

参考文献

Abeillé, A. et Godard, D. (dir.) (2021) : *La Grande Grammaire du français*, Imprimerie nationale.

Ameka, F. (1992) : « The universal yet neglected part of speech », *Journal of Pragmatics* 18 (2-3), *Special issues on 'Interjections'*, pp.101-118.

Biedermann-Pasques, L. (1995) « Approche d'une histoire du point d'exclamation », *Faits de langues* 6, *L'exclamation*, pp. 13-22.

Bottineau, D. (2013) : « OUPS ! Les émotimots, les petits mots des émotions : des acteurs majeurs de la cognition verbale interactive », *Langue française* 180 (4), pp. 99-112. <https://doi.org/10.3917/lf.180.0099>.

Buridant, Cl. (2006) : « L'interjection : jeux et enjeux », *Langages* 161, *L'interjection : jeux et enjeux*, pp.3-9.

Colombat, B. (2013) : « L'héritage du modèle latin dans les grammaires françaises à la Renaissance », *Documents pour l'histoire du français langue étrangère ou seconde* [En ligne], 51 | 2013, mis en ligne le 31 janvier 2017. URL :

- <http://journals.openedition.org/dhfles/3710> ; DOI : <https://doi.org/10.4000/dhfles.3710>.
- Danon-Boileau, L, Morel, M.-A. (1995) : « Présentation générale », *Faits de langues* 6, *L'exclamation*, pp. 5-12.
- Demonet, M.-L. (2006) : « Eh/ hé : l'oralité simulée à la renaissance », *Langages* 161, *L'interjection : jeux et enjeux*, pp.57-72.
- Demonet, M.-L. (2009) : « Interjection et exclamation chez Montaigne. L'expression des affects », dans *La langue de Rabelais et la langue de Montaigne*, Actes du Colloque de Rome, septembre 2003, éd. J. Céard et F. Giacone, Genève, Droz, pp. 387-404 (version d'auteur, 13 février 2016).
- Goosse, A. et Grevisse, M. (1988) : *Le Bon usage*, douzième édition refondue par A. Goosse, Duculot.
- Kleiber, G. (2006) : « Sémiotique de l'interjection », *Langages* 161, *L'interjection : jeux et enjeux*, pp.10-23.
- Kleiber, G. (2015) : « Enquête sur un « petit mot » de douleur : l'interjection *Aïe !* », *Revue des sciences sociales* 53, *Entre douleurs et souffrances*, pp.146-151.
- Kleiber, G. (2016) : « Du cri de douleur au signe de douleur : l'interjection *Aïe !* », *Synergies Pays Scandinaves* 11-12, pp.113-133.
- Pagani-Naudet, C. (2016) : « De l'admiration à l'exclamation. Élaboration d'un concept ou construction d'un problème ? », *Revue de Sémantique et Pragmatique* 40, *Exclamation et intersubjectivité*, pp.59-77.
- Piron, S. (2020) : « De l'interjection », *Langue(s) & Parole : revista de filología francesa y románica* 2, pp. 145-72.
- Riegel, M., Pellat, J.-Ch. Et Rioul, R. (1994) : *Grammaire méthodique du français*, 2^e édition corrigée, 1996, PUF.
- Riegel, M., Pellat, J.-Ch. Et Rioul, R. (2009) : *Grammaire méthodique du français*, 7^e édition revue et augmentée, PUF.
- Rosier, L. (1995) : « L'interjection, partie "honteuse" du discours », *Scolia : Sciences Cognitives, Linguistiques et Intelligence Artificielle* 3, pp.109-121.
- Świątkowska., M. (2000) : *Entre dire et faire : de l'interjection*. Wydawnictwo Uniwersytetu Jagiellońskiego, Kraków.
- Świątkowska, M. (2020) : « L'interjection », *Encyclopédie Grammaticale du Français*, en ligne : <http://encyclogram.fr>. DOI : <https://nakala.fr/10.34847/nkl.3337cba0>.
- Tesnière, L. (1959) : *Eléments de syntaxe structurale*, deuxième édition revue et corrigée, 1988, Klincksieck.
- Vallat, D. (2021) : « Les interjections dans le commentaire de Donat », *Eruditio Antiqua* 13, pp.215-235.
- Wilkins, D. P. (1992) : « Interjections as deictics », *Journal of Pragmatics* 18 (2-3), *Special issues on 'Interjections'*, pp.119-158.
- Wilmet, M. (1997) : *Grammaire critique du français*, 2^e édition, 1998, Duculot.
- 青木三郎 (2015) : 「フランス語文法における間投詞の一議論」友定賢治編『感動詞の言語学』ひつじ書房, pp.239-251.
- 小川芳男・林大 (編) (1982) : 『日本語教育事典』縮刷版 (1987)、日本語教育学会編、大修館書店。
- 小野正弘 (編) (2007) : 『日本語オノマトペ辞典』小学館。
- 定延利之 (2005) : 『ささやく恋人、りきむレポーター—口の中の文化』岩波書店。
- 定延利之 (2015) : 「感動詞と内部状態の結びつきの明確化に向けて」友定賢治編『感動詞の言語学』ひつじ書房, pp.3-14.
- 杉本つとむ・岩淵匡 (編) (1994) 『新版日本語学辞典』おうふう。

- 時枝誠記 (1950) 『日本文法口語篇』 改版、1978年、岩波書店.
- 友定賢治 (編) (2015) 『感動詞の言語学』 ひつじ書房.
- 日本語文法学会 (編) (2014) 『日本語文法事典』 大修館書店.
- 浜野祥子 (2014) : 『日本語のオノマトペ 音象徴と構造』 くろしお出版.
- 森山卓郎 (2015) : 「感動詞と応答—新情報との遭遇を中心に」 友定賢治編 『感動詞の言語学』 ひつじ書房,
pp.53-81.
- 八亀裕美 (2008) 『日本語形容詞の記述的研究—類型論的視点から—』 明治書院.
- 山口仲美 (2019) 『オノマトペの歴史 1』 風間書房.
- 山田孝雄 (1908) 『日本文法論』 宝文館出版.

(たけうち りえ / リール大学)